

## 心のキャッチボール

小 四

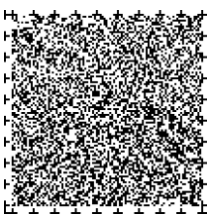
「ドンマイ、ドンマイ。気持ちを楽にして。」

ぼくは、少年野球でピッチャーをやっています。うまくストライクが入らなかつたりバッターに大きなヒットを打たれたりして、落ちこみそうになった時、必ずチームメイトが声をかけてくれます。ぼくは何度もその言葉に助けられてきました。また、ぼくが内野を守っている時は、ピッチャーの気持ち分かるので、一球ごとにえ顔で声かけをしています。このようにして、ぼく達のチームはおたがいに仲間

を思いやる気持ちをもって試合にいてるんで、少しずつ強いチームになってきています。

ぼくは、野球をようち園のころからやっています。上級生のプレーを見て、いつかぼくも試合に出たいという強い気持ちをもつようになりました。友達に負けたくないという思いも出てきました。そんながむしやらかな思いで続けてきた練習が、よい結果につながるようにもなりました。

三年生の四月のことでした。ぼくは、四年生のチームメイトとともに、春の大会に出場し、初めて二位のトロフィーを受け取りました。うれしさとともに、自分はできるんだという自信が高まってきました。



しかし、この頃のぼくは「自信」と「うぬぼれ」の区べつができなくなり、友達をきずつける言葉を言うようになってしまいました。

「何だよ。こっちにくるんじゃねえよ。」とクラスの女の子に冷たい言葉を言うようになりました。言っではいけない言葉だと知っていたはずなのに、その女の子に言ってしまったのです。

また、体力テストのボール投げの時に、同じチームメイトの測定結果に対して、

「それぐらいしかとばなかったの。ぼくはもつととんだよ。」

と思わず口にしてしまいました。今までいっしょにプレーしてきた友達にも、ぼくのうぬぼれからそんな言葉を言っ

てしまい、友達をきずつけて

しまったのです。その時のぼ

くは、いったい何を指して

いたのかなと、はずかしく思います。

そんな心のままで生活していたので、

野球のプレーも思うようにいかなく

なっていました。

「ぼくはかんとくやコーチから周りを

よく見る！」

「一人で野球をやっているんじゃないぞ！」

と何度も注意を受けました。ぼくの強

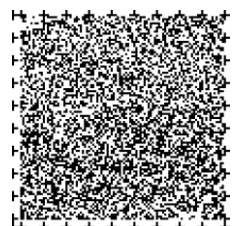
がりには、ぼくを強くはしてくれないん

だと感じ始めました。

そんな時、家族でプロ野球中継を見

ていて気がついたことがあります。

「この選手のヒーローインタビューは、



いつもファンのみんなとチームメイトへの感謝の言葉だよね。」  
と父と母が言ったのです。ぼくは、はつとしました。あんなにすばらしい選手が、いつも仲間や応援してくれるファンのみんなを大事にしている、それを感謝の言葉に表している。ぼくは、これが本当の強さなのかなと感じました。

ぼくは、今までの自分を乗りこえたかと思いましたが。このままだと友達をきずつけるだけの弱い自分になってしまふと気づいたからです。

それからぼくは、友達が安心できるような言葉を毎日進んで言うように心がけてきました。それは、「大じょうぶだよ。」「手伝おうか。」「気にしないで。」

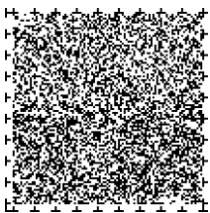
といった言葉です。二学期が終わるころになると以前ぼくがきずつけてしまっていた子から、教科書を見せてもらったり、野球のチームメイトからはげましの言葉をたくさんもらったりしました。ぼくは心がいつも温かくなりました。

「温かい言葉をつかっていると、自分に返ってくるんだね。」

とぼくが母に言うと、「心のキャッチボールだよ。相手思いやってキャッチボールするのと同じだよ。」

と母は笑顔で言いました。

今日も試合がありました。ぼくは進んではげましの言葉をつかい、チームメイトからも元気づけ



られました。その結果、勝利をつかむ  
ことができました。これからも、たく  
さんの友達と心のキャッチボールをし  
ていきたいです。みんなといつまでも  
え顔で生活したいです。

